



京都看病婦学校における訪問看護活動 : J. C. ベリーと3人の宣教看護婦による地区活動について

著者	川 早知子
雑誌名	Human Welfare : HW
巻	7
号	1
ページ	71-84
発行年	2015-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027346

〔論 文〕

京都看病婦学校における訪問看護活動

—J. C. ベリーと3人の宣教看護婦による地区活動について—

徳 川 早知子*

はじめに

現今の高齢社会にあって疾病や高齢化による障害を持ちながら療養生活を送っている人々は少なくない。看護職は、在宅で自立した健康な生活を目指す人々に、医療、福祉各分野で働く人々と連携しつつ、住み慣れた家庭や地域の中で、良質の在宅ケアを提供できるように、訪問看護活動をはじめ、諸活動を行っている。しかし、訪問看護ステーション事業など、わが国におけるその歴史は浅い。

1946年当時、GHQ看護課長であり、戦後の日本の看護を方向付けたグレース E. オルトリは、「今日の看護婦という職業の地位及び技能を充分認識するためには、時々過去の著名な（看護の）指導者または事業創立者等のことを想起してみることがも有益である」²⁾と、終戦後間もなくして、日本の看護婦に語りかけている。新島襄が J. C. ベリー、中村栄助、リンダ・リチャーズ等の協力を得て、自己犠牲と多くの困難の後に、京都看病婦学校が創設されたのは、1886年であり、既に130年近く前であった。京都御所蛤御門近くに、同志社病院と京都看病婦学校は創設され、新島襄が看病婦学校設立目的³⁾の一つとした、巡回看護婦の養成を受けて、同志社病院における医療看護と共に、京都看病婦学校に連なる、医師や宣教看護婦とその弟子たちにより、病を得ても医療の光の届かない人びとの元へ、出かけて行き、施療を行った。そこにわが国における現在、発展しつつある訪問看護事業の原点があった。新島襄、J. C.

ベリーと共に宣教看護婦であるリンダ・リチャーズ、Ida V. スミスそして、ヘレン E. フレーザの事蹟を訪ねた。

筆者は京都看病婦学校と同志社病院での巡回看護活動は、訪問看護制度の源流として、新島、ベリーが巡回看病婦養成事業を看護婦教育の根本に考え、位置づけた。

本稿は1887年に新島襄が宣教医ベリーとリンダ・リチャーズの協力を得て創設した京都看病婦学校・同志社病院における巡回看護婦の養成と、宣教師たちの実践について記述した。

また、わが国訪問看護事業の原点となる「同志社病院地区看護団（Doshisha Hospital District Nurse's Corps）」の活動について述べ、わが国訪問看護制度前史における源流を探った。この同志社病院における巡回看護事業については「詳しいことはわからない」⁴⁾と、されていたが、筆者はかつて同志社社史資料室で同志社病院地区看護団についての記述に出合った。そして3人目の京都看病婦学校監督であり、また病院婦長(The Superintendent of Nurses and Hospital Matron)であった宣教看護婦ヘレン E. フレーザとその弟子たちによってなされた同志社病院地区看護団の活動について述べた⁵⁾。

第1章 研究の現状

若くして洗礼を受け、終生キリスト教徒としての道を歩み続けた日本社会事業の父といわれた生江孝之は、わが国巡回看護婦事業の始まりを「明治18（1885）年春、米国の宣教師ベレー氏並故

キーワード：宣教看護婦、京都看病婦学校、同志社病院、訪問看護

* 関西学院大学大学院人間福祉研究科博士課程後期課程

新島襄氏が京都において我が国最初の看護婦養成所を開始し、同所において巡回看護婦事業を試みたことである」⁶⁾と記述している。さしあたり、看護教育の場、或いは医療の現場で訪問看護事業に関わっている、看護師・保健師、研究者などのわが国訪問看護前史の捉え方を瞥見し、先行研究を整理しておくことにする。

1. 先行研究の状況と本研究の意義

わが国訪問看護の萌芽期における歴史について記述された7編の研究より、著者が日本の訪問看護の始まりを、どこに求めているのかについての記述が見出される。

先ず、木下安子は公衆衛生看護の萌芽について説く中で、1892年に同志社病院が巡回看護制度を取り入れた中に、日本訪問看護の萌芽が見られるとしており、小規模ではあったが、西欧における訪問看護婦の発生の事情とよく似通っているとも述べている。また、木下は『近代日本看護史』（メヂカルフレンド社、1969）の中で、1892（明治25）年、京都看病婦学校は巡回看護婦制度を取り入れた」と、指摘して、木下は佐伯理一郎による次の言葉を、河上武著である『現代日本医療史』より引用し、「真実の貧民は病院に行くべき衣服を持たぬ。それ故に来るを待たずしてまずこちらより訪ね廻りて往きて助くべきであるという考えに立っておこなわれました。」と述べている（p.123）。第2に、土曜会歴史部会（1952年に結成された保健婦有志の集まり、看護史、保健婦史研究サークルを結成して、わが国において看護史研究の先鞭をつけた。）の活動の中心となった研究者、高橋政子は『日本近代看護の夜明け』において、「近代看護教育の始まりが、患者側の要求と結びついた派出看護にあったことはすでに慈恵の例で明らかにされ、私たちが驚かせたが、同志社、桜井も派出看護にはかなり重点を置いて、ことに同志社においては、いち早く（明治25年訪問看護事業の採用を試みていることは、保健婦歴史の前史とからみあわせて再検討を試みたい点である）」と、記述している（医学書院、1973、p.137）。また、高橋は『日本公衆衛生の歴史』において「京都に生まれた日本最初の訪問看護」として、紹介している⁷⁾。

第3に亀山美知子は「産婆と看護婦のあゆみ」『公衆衛生看護学総論I』（日本看護協会出版会、1995、p.49）で、「京都看病婦学校のリチャーズと医師 J. C. ベリーは病院で巡回看護活動という後年の保健婦に近い事業を実施した」と、紹介しているが、リチャーズが行った具体的な活動については示されていない。また、亀山は京都看病婦学校・同志社病院において行われた年代については、記していない。第4として、佐藤美穂子は、「日本における訪問看護制度」『訪問看護白書 訪問看護10年の歩みとこれからの訪問看護』（日本訪問看護振興財団、2002）において、「日本における訪問看護の経緯 日本では1920年代後半から日本赤十字社や聖路加国際病院などの看護師が母子や被災者を対象にボランティア的に訪問看護を行っていた」（p.160）と述べ、明治時代に同志社看病婦学校においてなされた訪問看護活動については触れていない。

第5に松野かほるは、「地域における看護活動の変遷と現状」『系統看護学講座 在宅看護論』（医学書院、2008）地域看護活動の「萌芽期」として「1886年新島襄による京都看病婦学校設立目的の一つに巡回看護婦の養成が含まれていた。巡回看護婦の制度が創設されたのは、1892（明治25）年で、キリスト教の婦人伝道師と同伴して貧困家庭の患者を訪問して看護をしたのが始まりとされている。」（p.23）とする。そして、第6に廣部すみえは、「訪問看護はどのように作られたか」『新版在宅看護論』（医歯薬出版、2009）において、訪問看護（巡回看護）の萌芽期について述べる中に、「東京と京都で、巡回看護活動が社会事業の一環として始まった」（p.187）として、1884年に有志共立東京病院の上流階級対象の派出看護と、1886年の新島等による同志社の看病婦学校設立の設置目的に巡回看護婦の養成が見られたと、記している。

最後に、大國美智子は『保健婦の歴史』（医学書院、1973）で、「保健婦事業の芽生え」の執筆に際し、英米の保健婦事業のわが国への紹介者として生江孝之を挙げ、生江が「わが国には看護婦はいても巡回看護事業はない」⁸⁾と論じているのを取り上げ、「生江よりも前、明治20年代に、京都同志社の新島襄が、米国宣教師などの協力によ

って、京都看病婦学校を設立したが、設立目的の一つには巡回看護婦の養成がふくまれており明治25年には真実の貧民は病院に行くべき衣服を持たぬ。それ故に来るを待たずして、まずこちらより訪ね廻りて往きて助くべきであるとして、巡回看護制度を試みた。」(pp.1-2)「キリスト教精神に基づき、看護婦と婦人伝道師がタイアップして、病者の家庭訪問をし、卒業生もまた、巡回看護事業をもって京都市民の中へ分け入って行ったといわれるが、詳細はわからない。」(p.2)と、記述した。

以上、わが国の近代看護の発展と訪問看護師の諸活動について注視、研究した亀山美知子をはじめ、地域看護に携わる看護師・保健師と看護学領域の研究者の記述された書籍等から、わが国における訪問看護萌芽期をどのように捉えているのかみてきた。1973年、大国美智子による『保健婦の歴史』の出版から既に40年余り経過しているが、訪問看護事業の源流は、とかくすると極めがたい。ただ、筆者により1998年に『同志社病院と看病婦学校第7年次報告書』によって、1892年4月から1893年3月までの同志社病院と京都看病婦学校に関するアメリカンボードへの公式の事業報告書を紹介したが、それによって京都看病婦学校における看護婦教育の最盛期の教育活動の状況と、生江孝之が、「わが国における訪問看護事業の濫觴である」⁹⁾と位置づけた「地区看護事業」¹⁰⁾についての具体的な資料を呈示できたと考えている。生江孝之においても、また、現代のわが国訪問看護研究者においても、京都看病婦学校、同志社病院でのリンダ・リチャーズの訪問看護における実践とその活動を支えた思想については、触れられていない。明治20年代の同志社病院と京都看病婦学校における訪問看護活動の全容が、明確にされないまま、徐々に風化され、大正期における訪問看護諸活動をこの事業の濫觴と考える研究者も見られるようになっていく。

本稿では、1986年新島襄等によって京都看病婦学校・同志社病院が開設された当時から、明治20年代に活動した3人の宣教看護婦であるリンダ・リチャーズ、Ida. V. スミス、ヘレン E. フレーザーと看病婦学校生徒、J. C. ベリー、新島襄の訪問看護への思想と実践等について記述した。

そして、日本訪問看護制度について、その前史を訪う時、京都看病婦学校・同志社病院まで遡り、1947年に、オルトが示唆したリンダ・リチャーズの活動とその著“Reminiscences of Linda Richards: America's First Trained Nurse”について、第10章(JAPAN)、第11章(SECOND YEAR IN JAPAN)を手掛かりに日本近代看護の先覚者であるリンダ・リチャーズが実践した地域における訪問看護についての具体的な事実を論述した。

第2章 京都看病婦学校の創設

新島襄はクリスチャンである医師に完全な教育を与えることは(伝道の)偉大な補助手段であると考えた。『現代語で読む新島襄(丸善、2004)』によれば新島襄は1874年10月、留学中にアメリカのバーモント州ラットランドで開かれたアメリカンボードの第65回年会で「日本にキリスト教主義の学校を作りたいので、資金の寄付をして頂きたい」(前掲書 p.116)と訴えた。新島のこのアピールは反響を呼び、会衆の好意によりかなりの募金がみられた。1874年の秋、新島は出国以来10余年ぶりに留学を終えて、帰国した。翌、1875年、新島は先ず同志社に英学校を開設した。新島は周知のように新島のこの医学部設立計画は実現しなかった。一連のこの構想の下で計画された看護婦の養成学校と同志社病院は、1887年に開業して、わが国看護婦養成事業の先駆的地位を占め、多くの看護婦・産婆の人材を病院や慈善事業の現場に送り出してきた。

1. 京都看病婦学校・同志社病院と巡回看護婦の養成

新島襄はベリー(J. C. Berry)と共に京都看病婦学校設立計画を進めた。

1885(明治18)年、新島の意向を受けてベリーは、看護婦養成所を設立することの必要性を、機会ある毎に人々に説いたが京都の人々に理解してもらうことは困難であった。なかでも医師は、「異口同音に看護婦に学問などさせては使ひ悪くて仕方がない、寧ろ是迄の通無学にして使役に便なる方が宜ろしと云ふのであるから、取り付き處のなき有様…」¹¹⁾とベリーを失望させた。ベリー

は東京の内務省衛生局長長与専齊に訴え、彼の計らいで大日本私立衛生会京都支部長半井澄が紹介され、ベリーは衛生会支部の講演会で、看護婦養成の必要性について世論に訴える機会を得た。その演説のなかでベリーは新島と共に今、京都に起こそうとしている看病婦学校は、特に婦長となるべきものの養成を行い、他府県における看護婦養成にも力を発揮することができると論じるとともに、同校における看護婦養成の目的は巡回看護婦を養成することでもあるとして次のように説いた。

…本校の事業に於て他の重立たる大切の一点は基督教の愛に感動せられ、十分に看病の術を知り、地方貧民救済の組織法の通曉し其住居する所の府県にありて、病に罹りたる人民の家に就き、自ら看病に従事せんとする婦人を養成する事是なり。抑も日本の人は貧苦の民を憐むの情鋭敏にして、是を救ふの慈善に厚ければ凡そ国中の真心ある男女は憐む可き家内に希望・慰安・快活を与ふる此事業を大に嘉みして深く賛成せらるる事ならん。¹²⁾

ベリーは貧しい病人の家庭を訪問して看病を行う巡回看護婦を養成する事は、家庭に希望と慰めと快活を与える事業でもあると考えていた。新島とベリーによる京都看病婦学校が巡回看護婦の養成を看病婦学校設立目的の一つに位置づけたことと、リンダ・リチャーズによる教育活動の中で、実践された訪問看護が、わが国訪問看護制度前史の最初の一頁となった。

2. 京都看病婦学校における宣教師と救療事業

明治期慈善事業の系譜的存在であるとされる J. C. ヘボン、Hebburn (1815～1911) の事業における思想の特徴は「使命感 mission を持って来日し、対象の個人的人格の尊重、そして科学的医療を行った」¹³⁾と吉田久一は指摘しているが、宣教師の備えたこのような特性は J. C. ベリーをはじめ、同志社病院・京都看病婦学校にアメリカンボードから派遣された3人の宣教看護婦の活動の中にも見出すことができる。ベリー (John Cutting Berry M.D) は1872 (明治5) 年アメリカンボー

ドの宣教師として来日し、伝道・医療・監獄改良・救済事業に関わり、人々に大きな影響力を及ぼした。彼は1847年1月16日、アメリカのメイン州に生まれ、1936年2月9日、マサチューセッツ州ワーセスタにて永眠した。

ベリーは4歳の時、父を失い、父の親友クリストファー・スモール夫妻のもとで生育した。医学教育はフィラデルフィアのジェファソン医科大学で受け、彼は1871年に同校を卒業している。来日後のベリーの事績は、1872年から1877年の間、神戸を中心に兵庫県立病院の外科医として、また同病院の相談役ともなり有馬、西宮、明石、加古川、姫路などで巡回診療・伝道に携わった。この時期にベリーは監獄を訪ね、劣悪な状況におかれた囚人の処遇の改善を目指す運動の先鞭をつけた。

ベリーは1879年の来岡以来、岡山においても衛生、医療、育英、教育伝道のため働いた。ベリーは1879 (明治12) 年から5年間、岡山県立病院の顧問として、近隣の町村を巡回して医療伝道を行い、同時に河本乙五郎によれば、岡山県病院長として、また、日曜学校を組織化しているという¹⁴⁾。

1883年、新島襄が京都に医学校・病院を創設する計画を持ち、ベリーに協力を依頼した。ベリーは1885 (明治18) 年から1893年10月に日本を去る迄京都において同志社病院・京都看病婦学校で医療、伝道、教育活動に従事した。

ベリーは新島の要請にこたえて米国に帰り、同志社に医学校を創設すべく各地を遊説し募金活動を行ったが医学校の開設には至らなかった。ベリーは来日以後、神戸での貧民施療活動・岡山県立病院院長として医療活動を行った十年前後の間にベリーが接した看護婦は「無学文盲の婦女子」であり、教育訓練を受けていないこのような看護婦には、貴重な人命を託せるものではない。善い看護婦を養成しなければ、彼が使命とする「完全の救療は望むべからず」¹⁵⁾との想いに至った。

ベリーは1886年9月20日、大日本私立衛生会 (会長は内務省衛生局長長与専齊) 京都支部講演会で、日本における看病婦養成の必要性とその意義について、また京都に設立しようとしている看病婦学校の利益について講演を行い、それを文章

にして印刷したものを全国の関係者に配布した。

新島襄、J. C. ベリー、中村栄助、リンダ・リチャーズらによって、同志社病院と京都看病婦学校が1887（明治20）年11月15日にそれぞれ開院式・開校式を行ったことについては先きに述べたが、同校における教育訓練は、1886年9月に開設された上長者町烏丸西入元浄華院町のデビス邸の同志社病院仮診療所において、リンダ・リチャーズにより既に始められていた。

3. 京都看病婦学校と宣教師

わが国において切支丹禁制の高札が撤去されたのは、1873年になってであった。以来、多くの宣教師が渡来してきたが、彼らは医療を行い、言語や音楽を教え、女子教育や慈善事業を行いながら、人々が外国人に抱く興味や関心を次第に宣教活動へ向けて行った。このことはI. V. スミスが1889年京都看病婦学校から北越学館に赴任した時、新潟ステーションでは新潟女学校でキリスト教教育に当たっていたジェーン・コザット¹⁶⁾は、当時長岡における婦人の聴衆（教会における特別礼拝や講演会への）は全体の7分の1以下という状態で、婦人層への伝道はなにもなされていないも同然であり、それだけに婦人宣教師のはたらきが必要であると訴えた。そのころ、教会の外から参加者を得るためには、縫い物や編み物、詩集、料理などの実技指導にもかなりの時間をさかねばならなかったようだ。婦人宣教師にこれらを教えてほしいという要請が殺到したからである。そして、婦人宣教師によるこれらの指導は、多数の日本婦人の心をとらえ、これを通して福音が注ぎ込まれる結果となった。」と、記述している。ジェーン・コザットは、日本に宣教師として来る人は、こういうことに無知のまゝ、来日することがないようにと、進言もしている¹⁷⁾。当初、救療事業を行ったベリーは「入院患者に対する平等無差別な神々しい態度」という印象を京都看病婦学校生徒に与え、生徒を教育し、市中に出て巡回看護をおこなった。宣教看護婦であるリンダ・リチャーズの宣教・看護教育活動も救療事業と深く関わっている。また、フレーザは地区看護団による巡回看護の制度を敷いた。

「宣教師たちが携えてきた多くの技術・文化の

中でも医療は最も人々が期待したものだった。1889（明治22）年10月13日、日出新聞は、京都看病学校においては、一に慈善事業の為、一つは看病事業研究の為、今回産病婦の貧者は依頼に応じ、分娩前より出産後まで一切の費用を同校より支弁し入院せしむることに決定したりといふ」と、報道されている。また、石井辰子の在学中（1891から92年頃）、「京都の柳の馬場に病院の出張所が設けられ、私達は巡回看護婦としていつも先生に伴はれて行ったものであるが、その当時医員たちはとかく貧民の救療を厭ひ、私達看護婦仲間では、どうしてよいかわからないことがあった。しかし、ベリー先生に至っては、風の這へるやうな汚い衣服を纏った貧しい人たちに対しても、いつも懇切丁寧に治療に努め、又、私達にたいしては、どうかあなた達が率先して貧しい人達を助けてやってください。さうすれば、自然に医員達もそれに倣って辛抱するやうになるであらうからといって、医員達に対しても、直接小言一つ云はず、自ら熱心に仕事に従事されるので、遂には医師達も仕方なくそれに同化させられてゆくといふ有様であった。」¹⁸⁾と、第6回生の石井辰子は「ベリーの感化力」に畏敬の念を持った。

第3章 3人の宣教看護婦

1. リンダ・リチャーズ

来日までの履歴

リンダ・リチャーズ Richard, Melinda Anne Judson（1841. 7. 21～1930. 4. 16）はアメリカ近代看護の重要なパイオニアである。彼女は、1841年7月24日、ニューヨーク州アントワープに生まれる。4歳で父と死別し、数年後には祖母を亡う。祖母の死によってリンダの母は4人の幼い娘達を連れて、ヴァーモントの実家に帰った。彼女は Lyndon Common School とヴァーモント州の Barton Academy で教育を受け、強い宗教的な信念に満ちた祖父の家で、幸福な少女時代を送った。

後年、リンダ・リチャーズは京都で宣教看護婦として働くが、当時、祖父の膝下で受けた宗教的な影響は大きかった。1872年9月1日よりマサチューセッツ州ロックスベリーのニューイングラン

ド母子病院訓練学校の生徒看護婦となり1年後に同校を卒業、リンダ・リチャーズの名前は、アメリカで最初に開設された訓練学校の第一期生、5人の1人として筆頭に上がっている。

ベルビュー病院夜間監督、マサチューセッツ総合病院訓練学校監督を経て1877年には英国を訪問しナイチンゲール（当時57歳）を訪ねる。

その後ボストン市立病院婦長であったが、アメリカンボードが日本で看護婦訓練学校を創設する計画を知り応募した。1887年にリンダ・リチャーズは宣教看護婦として来日した。

アメリカンボード岡山ミッション・センターで数ヶ月間日本語を学び、既に述べたが同志社のデビス邸で同年9月から1回生5名の教育を始めた。

オルトの論述¹⁹⁾にもあるように、リンダ・リチャーズは、訓練中の生徒を家庭看護に派出し、指導者として生徒と一緒に患家を訪ね、スーパーバイズを与えていた。「派出看護婦の必要が叫ばれ始めた時、各家庭内の状況が病院のそれと余り違いすぎるため、病院で訓練を受けた者ではその要求に応じかねることが解ってきました。リチャーズ女史は訓練中の生徒看護婦を家庭内の患者に送り出す慣を始めた最初の人で、未だ指導を受けている間に、即ち難問題に出会った場合、指導者の相談できる立場にある間に、こうした経験を得ておくことは、彼のためになると云う考えからでありました」と記述している。

リンダ・リチャーズは後にボストンで、『回想記』²⁰⁾を出版した。訪問看護に関連して、同書第10章 Japan, 第11章 SECOND YEAR IN JAPANを繙いてみると、リチャーズは度々派出看護に向向していたのに気づく。京都看病婦学校・同志社病院における学生の監督者であり婦長でもあるリチャーズによるスーパービジョンの下での在宅看護が行われ、師弟共に看護の臨床での経験が習得されていった²¹⁾。更にリチャーズは、「日本における看護婦の教育訓練について最初の六ヶ月間は、学校内だけの実習を考えていたようであるが、翌1887年春に社会的・政治的にも地位のある人から妻のジフテリアの看護を依頼された」と、記述している²²⁾。リチャーズはまたとない生徒の教育の場であると思い、一人の生徒を派遣して看護実

習をさせた。リチャーズ自身も毎日患者を訪問して指導した。リチャーズはこのジフテリア患者の派出看護以来、看護婦の訓練に派出看護を取り入れるようになった。また、リチャーズは病院での看護と同じ位、病院外での看護の重要性を感じた²³⁾とも述べている。

リチャーズは生徒を個人看護に出すことは、看護婦生徒達がお金を得ることにより、経済的に自立できるという事も、自分の歩んできた体験から生徒に教えることができた。また生徒達が家庭に向向いて、病人を看護することは地域の人々がその働きを通して、訓練を受けた看護婦のすばらしさを理解することにもなると考えた。京都におけるリンダ・リチャーズは看病婦学校・同志社病院の看護婦監督の仕事と同時に、近隣の町や村に出かけ日曜学校での子供達への宣教や、婦人会でバイブルクラスを開いて、キリスト教を布教するという宣教師としての活動を行った。リンダ・リチャーズの2年間の看護婦教育訓練の結実として1888年6月、4名の trained Nurse の誕生を見た（1名は結核のため退学）。リチャーズは、「若い女性が訓練を受けた看護婦として専門的な職業に就くことは、これまでの日本の慣習から考えると大きな変革である」²⁴⁾と述べ、看護教育事業は単に看護婦を養成するに留まらず、日本の女性を従来からの服従の生活から解き放ち、進歩と自己発展へと導いていくことにもなったと考えた。

リンダ・リチャーズは、訓練を受けた専門的な看護婦の養成という、日本で開拓的な任務を終えて、1890年に京都を後に、横浜、函館で夏を過ごし、10月スエズ経由でフランスの病院訪問の後、4年半ぶりに米国に帰った。通説では、リンダ・リチャーズの在日期間は5年とされているが、本稿ではアメリカンボード宣教師文書所収中のリンダ・リチャーズより総主事、クラークへ宛てた私信に依った。

1915（大正4）年1月、佐伯理一郎は京都医師倶楽部で看病婦学校卒業生と医師達に向向かって、「ドクトル・ベリーとミス・リンダ・リチャーズとを憶ふ」として演説を行い、この両者の日本における功績を述べた。ベリーについては前年に勲三等を授与されているが、リチャーズの働きに対しても相当の叙勲がなされなければ、道義に悖る

と訴えた。

京都府知事大森鍾一に宛てて佐伯は「願書」で次のように訴えている。概略を記すと、米国婦人リンダ・リチャーズは1885年12月に来朝し、京都看病婦学校を創立した。5年11ヶ月の滞在中熱心に看護の学術と実践とを教授した。特に実地看護の教育には貧民の施療が重要であると考え、リンダ・リチャーズは、毎週一回、自ら隊長となって数名の看護婦と共に貧窮民の多い町の隅々迄訪問し、患者を見つけては、看護を行った。リチャーズの業績は看病学以外に、貧民の看護を通して、救済の必要性を生徒に教育した。また、京都看病婦学校は、我が国における新しい制度の看護婦学校の模範的存在である。そして、創設より30年経過して、250人に及ぶ卒業生を出している。その上、リンダ・リチャーズは現在76歳という老齢ではあるが、米国において現在もなお、看護婦養成事業に携わり、篤志家として、多くの人々から尊敬を受けておられると述べてアメリカにおけるリンダ・リチャーズの近況を記して人々に伝えた。

我が国派出看護の歴史において、桜井の大関和による派出は、1888（明治21）年4月が最初であり、慈恵の鈴木まさ子が1891（明治24）年に始めたようだ。同志社においても救療事業としての訪問看護のみならず、リンダ・リチャーズと弟子たちによる、派出看護もなされていた²⁵⁾。

2. Ida V. スミス

スミス Ida Victoria・Smith（1856. 11. 2～没年不詳）は、リンダ・リチャーズが帰国した1890（明治23）年1月23日には同志社社長新島襄が永眠し、小崎弘道が看病婦学校の校長となった。リチャーズの帰国に伴い、新潟で伝道に従事していたスミスが看病婦学校に帰って、二代目看護婦監督と同志社病院婦長となった。

スミスは1856年11月2日、アメリカ・ニューハンプシャー州、フィッツウィリアムで生まれ、ホリヨークの女学校を経てコネチカット州立看護学校を卒業、さらにニューヨークで産科看護学を学んだ。スミスの学んだマウント・ホリヨーク（セミナリー）は1837年メアリ・ライオンによって創立され、その校風には強い宗教的雰囲気が見ら

れると共に、女性の地位を向上させ、女性の知的レベルを向上させることに情熱を傾けたアメリカ最古の女子校等教育機関でもあったと言われている。またスミスが教育訓練を受けたコネチカット州立看護学校は、ニューイングランド婦人・小児病院、バルビュ訓練学校に次ぐ学校であり、ニューヘブン病院訓練学校ともいい、1979年に『ニューヘブン看護便覧』を刊行した。京都看病婦学校では、手術室看護、電気治療、産科看護等の領域ではスミスが婦長時代に既に、この便覧を教科書として用いていた。また、コネチカット州立看護学校は、アメリカでの看護婦養成機関の中でも指導的位置を保ち、後に大学と合併している。さらにスミスはニューヨークで産科看護学を学んでいる。

スミスは1889年2月京都看病婦学校へ着任し、マッサージと病人食調理について英語で教授した。短い期間であったがリンダ・リチャーズとスミスという二人のトレンドナースと一緒に教育に当たった。スミスは、1889年6月、新潟へ転じ教育、伝道活動を行っていた。1890年、京都看護婦学校では春からリンダ・リチャーズの健康状態がすぐれず、リチャーズは京都を出て上海で転地療養に入ったり、伊豆・箱根と静養しつつ健康の回復を図っていた。リンダ・リチャーズは同年9月、ボストンのアメリカンボード本部の Dr. Clark への手紙で帰国の許可を願い出て、10月15日には神戸から帰国の途についた。

スミスは新潟で北越学館、英和女学校で教育に携わり、地域の農村における伝道活動も行っていた冬は深い雪に覆われ、日本語の不十分なスミスにとって最初の冬は困難であっただろう。スミスは、1889年9月に北越学館に着任したが、着任後一ヶ月も経たない内にかなり奥地の沼垂伝道を開始している。その伝道地域は町から遠く離れた辺鄙な土地であった。スミスの新潟での在任は短期間であったが、この期間に病人が出たと言っただけで家庭に呼ばれてその看護を行っている。外国人宣教師にとって、地域の人の家に出かけて在宅の病人を看取り信頼を深めていくことは、宣教活動の大きな力となった。

スミスは、アメリカンボード海外伝道部総主幹、N. G. クラーク夫人に宛てた手紙に、北越学

館で8人の男子生徒を教えており、時には一緒に伝道旅行に行くとき書き送り、手紙の中でここ（北越学館）に留まっておきたいと希望を伝えている（1890年7月）が、同志社病院院長であるペリーの勧めで、1890年7月30日には北越学館から京都看病婦学校に赴き、9月にリнда・リチャーズに続き、二代目 Superintendent of Nurses and Hospital Matron となった。在任中の京都看病婦学校に在学した生徒は第4回生から第6回生である。第6回生の岡本老乃については、娘の医学博士である岡本さやかによる『ヨブの如く』が出版されている²⁶⁾。

3. ヘレン E. フレーザ

看護事業の始められた1892年は佐伯も「此明治二十五年といふ年は恐らく本校全盛の一なりしならん」と記しているが、1896年のフレーザの解雇による帰国と翌1897年5月には同志社委員会が学校と病院を廃止して、「同志社病院及び京都看病婦学校の経営を佐伯理一郎に一任する」ことが決められ、同年9月24日の社員会で、同志社病院の地所、建物の一部が佐伯理一郎に譲渡することが提案され、承認されている²⁷⁾。

ヘレン E. フレーザは1892年1月、同志社病院・京都看病婦学校に着任。30歳であった。解雇されたのは1896年8月11日付である。フレーザの前任者スミス of the 突然の離職という困難な状況に学校が直面していただけに、彼女の来日は皆に喜んで受け入れられ、直ちに学校で生徒達の信頼と好意を得た。佐伯理一郎は、京都看病婦学校において、フレーザ着任の1892年について「此明治二十五年といふ年は恐らく本校全盛の一なりしならん」と、『京都看病婦学校五十年史』明治二十五年の項で記している。この年に、フレーザは京都看病婦学校で従来、ペリーらによる救療事業として行われてきた貧民への巡回訪問を巡回看護活動として発展させた。来日までのフレーザの看護活動の場はニューヨークであった。ニューヨークでは、リアン・ウォールドが1891年にニューヨーク病院看護婦学校（New York Hospital's training school for nurses）を卒業して、イーストサイドの貧しい移民の中でセツルメントを始めようとしていた。公衆衛生看護事業がアメリカで発

展し始めた時期でもあった。ここで、フレーザ在任中の同志社病院と京都看病婦学校についての状況を見ると、1892（明治25）年6月に第5回卒業式が行われ、行本きち、斉藤みち等9名が卒業した。卒業生たちの評判は好く、地域における救療活動において不可欠の働きをしている。

“She is doing splendidly both in the hospital and in the outside (district) work. She brings me such interesting accounts of her visit to the poor, and they like her so much. We think she is a treasure.”

この手紙は東京赤坂病院に就職した卒業生についてホイットニー夫人がその消息を報告してきたものである²⁸⁾。京都看病婦学校卒業生は、赤坂病院に数名働いている。この病院においても、卒業生らは、訪問看護を行っており、家庭訪問で患者の慰安に努めたようだ。

地元の平安教会からは、次期卒業生の中から一人、教区の看護婦として派遣するよう要請しており、すでに4カ所から募集があると第7次報告書は報じている。

1893（明治26）年には、上野老野（愛知病院婦長として赴任）、吉田辰子（石井十次の継室となり、石井の岡山孤児院事業を援助する）等10名が卒業。この年11月には、同志社病院院長・京都看病婦学校長 Dr. ペリーは夫人の病氣療養と医学視察のため欧米に向かい、同志社は副院長を院長に昇格させた。併せて帰国しても院長にはしないとペリーに通告した。1894年、同志社病院より、新富小路仁王門愛隣社内にある同院出診所（従来、救療事業が行われていた）を経営上の理由により廃止する旨、届ける。

同年10月には、日清戦争のため10名の看病婦学校生徒を広島臨時病院に派遣しており、11月には新島未亡人も赤十字看護婦取締として、広島臨時病院で働いた。

ヘレン E. フレーザの在任中、京都看病婦学校を50名の卒業生が巣立っていった。これらの卒業生たちはその教育カリキュラム上の一教科として位置づけられた地域看護 District nursing を学び、看護学はフレーザによる『実用看護法』（成

瀬四壽訳にて明治29年9月5日警醒社書店より発刊された)をテキストとして教育された。

同書の「凡例」でフレーザは1896(明治29)年6月30日付で次の通り記述している。「此書に記載する所は元我京都看病婦学校に於いて教授用に供せしものなり。然るに之を編纂出版して世に廣くせんとの勸めを受け居りしが、今般教授を辞し本国に帰返することとなりたれば爰に其一般を記載して我日本に於ける記念物となし只に看病婦のみならず母たり妻たる人の看病心得の一助に(中略)」と出版の目的と経緯を説明している。

次いでフレーザは『實用看護法』は自分が著述したものではなく、フレーザの母校であるベルビュー看護学校で、用いられていた教科書と、フレーザ来日前、すなわち1890年頃米国で最も優れていたC. WeeksとI. Hamptonが著述した教科書から選んで、日本人向きに編纂したのもであると『實用看護法』の由緒を説いている。L. R. SEYMERはその著²⁹⁾で、看護婦の教科書について、「(前略)特定の訓練学校向けのものとして書かれた最初の本は、何人かの女医が著したベルビュー病院学校の1878年発行の《看護便覧》とその次の年にニューヘブデン病院のコネチカット訓練学校が出版した《ニューヘブデン看護便覧》であろう。看護婦の著した最初のアメリカの教科書はクララ・ウィークスが出した《看護教科書》であり、これは広く使われた。1893年にはハンプトン嬢の《看護—その原理と実際》が出た。」とアメリカにおける看護婦の教科書について記述した。

セイマーのアメリカにおける近代看護の発展と教科書についての考察から、1892(明治25)年に京都看病婦学校で使用された教科書のみを取り上げてみても、同校がいかにアメリカ近代看護と深い関わりを持っていたかを知ることができる。

ヘレン E. フレーザは1891(明治24)年の暮れから1896(明治29)年6月の第9回卒業式後まで同志社病院婦長、京都看病婦学校監督として5年近く在職した。フレーザは看病婦生徒の教育、地区看護事業の創設、『實用看護法』の執筆など、京都看病婦学校発展の全盛時代をもたらした。

フレーザの活動は通訳であり、教え子の成瀬

(百崎)四壽の働きに負う所が大であった。成瀬四壽については、筆者はかつて、神戸市の自宅に成瀬(百崎)四壽の長男である百崎辰雄夫妻を訪ね、面談して、成瀬の人となりと京都看護婦学校での教育と活動、カナダ、ニューヨークの留学などについての知見を得て、1990年第21回看護学会で発表するまで、殆んど紹介されることはなかった。宣教看護婦を支えた日本人看護婦の活動に現在の光を当ててみることも必要であろう。

京都看病婦学校は1905(明治38)年6月の卒業生を送り出したのを最後に、同志社の手を離れていった。

第4章 アメリカンボードへの第7年次報告書(American Board The 7th Annual Report, 1893)をめぐる

生江はJ. C. ベリーによる救療事業に伴った巡回看護婦事業についての紹介はあるが、1893年の同志社病院と京都看病婦学校第7年次報告書に記載されたフレーザを中心になされた京都看病婦学校の「地区看護における訓練」と「同志社病院地区看護婦組合」の巡回看護婦事業については触れられていない。1893年に発行されたThe Seventh Annual Report Of The Doshisha Mission Hospital And Training For Nurses(アメリカンボードへの京都看病婦学校・同志社病院第7回報告書:原文英文)により、京都看病婦学校・同志社病院において、フレーザを中心になされた地区看護(District Nursing)について、その訓練、目的、規則、方法、地域社会での活動等は次のようである。

1)『同志社病院と京都看病婦学校の第七年次報告書』は1892年4月から1893年3月の同志社病院および京都看病婦学校に於ける活動状況のアメリカンボード本部への年次報告書である。この間の主だった出来事は、京都看病婦学校が第5回卒業式を挙行し、その式場で、卒業生が看護婦の誓詞を斉唱したこと、新しく伝道の一部として施療所の支所が市中に開かれたことと、機関誌“同志社ホスピタルメッセンジャー”が発刊されたこと、そしてカリキュラムに実践的なコースである地区

活動における訓練 (Training in District Nursing) が加えられたことである。

同志社病院では治療所の支所の開所に伴い、地域の貧民のための諸活動が必要となった。地区看護活動はそのような問題解決の一つの施設として考えられた。この地区看護は看護教育における実践活動として京都看病婦学校の上級クラス (2年生) の生徒達に課せられた。「生徒達は興味と熱意を示してこの地区看護活動に取り組み、地域の人からは喜ばれた」と記されている。一連のこの活動を指導した、宣教看護婦のフレーザ (Helen E. Fraser) は看護婦生徒の教育の中で初めて実践した教授活動を顧みている。

2) 地区看護 (District Nursing) を行うために同志社病院地区看護婦組合が組織されたが、この団体の目的、規則、勧める言葉、病気の人たちへの紹介カードについて述べる。

目的 この団体の目的は責任者である医師の監督の下に病人の在宅看護をすること

(1) 病人の看護をしている母親や他の人々に、実践的看護の基礎や、病人食の調理法を指導すること。

(2) キリスト教の真実の知識を広め、正しい生活を鼓舞し、キリスト教の慰安を奉仕する人々に知らせることである。

規則 次に「規則」として、訪問看護婦が遵守しなければならない点について規定されている。訪問看護婦は夜は従事しないこと。訪問看護活動は無報酬であること。また訪問看護婦は看護、衛生、節度、慎重さの習慣を母親達に指導する重要性和、キリスト教のモラルを常に心に留めておくこと。訪問看護婦は、担当の医師の指導に注意深く従い、また情報を伝えるために報告書を残しておくことなどが義務付けられている。

勧める言葉 (Exhortation) 忍耐強く、優しくそして親切であること。病める人との交わりのすべてを通して生けるキリストが共にあり、彼等を見守っておられる天なる父がおられることを示すこと。彼等を愛し、彼の存在によって永遠のいのちを与え、彼の奉仕によって終わることのない喜びを与えてくださる救世主がおられることを彼等に教示すること。

病気の人たちへの紹介カード 同志社病院地区看護婦組合の訪問看護婦は、病気の人たち及び医師への紹介カードを携帯している。「このカードの携帯者は、地区看護婦組合の一員である。この目的は、病人の家を訪問すること。仕事は無報酬である。もし援助が必要であれば、毎朝訪問し援助する。」と印刷されている。

医師への紹介カードにも、次のように書かれている。

このカードの携帯者は、同志社病院の地区看護婦組合の一員である。目的は病気の貧しい人々からの報酬を何ら期待することなく、人々へのキリスト教の愛の奉仕として行う。もし希望があれば、一日に一度午前中に患者を訪問し、患者の看護についての指示を患者に注意深く守らせ検閲用の書類を書かせる。

さらに、以上の紹介カードの他に、印刷されたカードが医師や病棟の職員、他の人々に残され、又それによって監督者はあらゆる困難なケースの連絡を受ける。これらの通知や要求は家族への紹介メモとして、看護婦が持参するというシステムで訪問看護事業はなされる。

同志社病院と退院後の患者への機関誌の発行 同志社病院では、退院後の患者を援助するために連絡を取る何らかの手段の必要性を感じて『病院の使者 (ホスピタルメッセンジャー、おとずれ)』を発行した。記事は衛生について、家庭看護、宗教的なニュース及び教訓、病院ニュース、看護婦の配置転換の報告、他支部の奉仕活動の報告などからなっている。京都看病婦学校においてその初期に、生徒達が家庭に入って訪問看護を行っていたが、この期になって、同志社病院地区看護婦組合として、訪問看護の専門職集団を結成しての活動はわが国における訪問看護事業の一つのより前進した形態を観るに至った。専門教育を受けたフレーザの指導により、同校の看護教育カリキュラムに従って看病婦生徒達は、教育訓練を受け、また、目的を持った組合を形成して、規則と倫理的規律を持ち、訪問看護事業はなされていった。

3) 生江孝之は 1933 年に「看護婦事業の社会

化³⁰⁾について論じた中で、わが国における巡回看護の歴史を次のように記述した。

我邦斯業濫觴とも称すべきものは明治十八年春、米国の宣教師ベリー氏並びに故新島襄氏等が京都において我邦最初の看護婦養成所を開始し、同所に於いて巡回看護婦事業を試みた事である。夫より明治二十四年に至りて現在の京都産婆学校長佐伯理一郎氏が欧米留学より帰朝して、ベリー氏等と計りて同所に看護婦の外、更に産婆の養成所をも並置した。斯くして十数年を経たる明治三十九に佐伯現院長が独立此事業を経営することとなり、現在では主として助産婦養成に重きを置いて居る。従って産院及び巡回産婆事業は大分盛に実行されて居るが、巡回看護婦事業は之に比すれば殆ど見るに足らざる程の状態のやうである。

生江はかつて同校において先駆的事業として発達してきた巡回看護の趨勢を目のあたりにして叙述している。

むすびにかえて

急速な勢いで少子高齢社会は進行しており、医療における訪問看護、訪問介護等人々の健康生活を支える社会システムの変化は目まぐるしいほどである。本稿に於いてはわが国訪問看護制度に至るその前史を新島襄の創設になる京都看病婦学校におけるキリスト教宣教師の諸活動に求め、その実践の跡を辿ると共に、若干の考察を行った。

我が国訪問看護事業の萌芽期として、同志社における明治20年代、1886年から1896年の間、或いは1923年関東大震災後、看護婦、産婆が罹災者の住むバラックを訪い看護活動を行った時とするか、派出看護の始まりとするのか、これまでも諸説があった。今回、新島襄、J. C. ベリー、リンダ・リチャーズ等によって始められた京都看病学校、同志社病院において我が国の訪問看護制度前史は始まり、1982年、ヘレン E. フレーザによる看護教育カリキュラムに位置づけられた一連の巡回看護活動をわが国訪問看護の源流と考える

に至った。今回の研究の当初において、リンダ・リチャーズがわが国訪問看護制度発展の上で果たした役割の評価が余りにも小さ過ぎたことに気付いた。リンダ・リチャーズによる“Reminiscences of Linda Richards America's First trained nurse”について、日本に関する2つの章により、リチャーズが母国の最も進んだ看護を日本で実施教育すると共に、自ら京都市中に出て、在宅看護に関わっていた事実が明確になった。この点については別稿に譲りたい。京都看病婦学校・同志社病院における訪問看護活動は、宣教師の帰国、同志社病院の閉鎖などにより、長くは続かなかつた。丸山博はかつて高橋政子らにより編集出版された『日本近代看護の夜明け』に、求められた「序文」の執筆に付言として、「つねに人物は時代の産物であると同時に新しい時代をつくるのも人物であること、それも単に一人や二人の個人の力ではなくて、結集された集団的精神活動の主体性を持った人々によってはじめて、目的は達成されるものである」と、記した。

新島襄によって計画され、始められた京都看病婦学校において J. C. ベリーとリンダ・リチャーズ等、3人の女性宣教看護婦、そこに連なる看護婦や産婆学校の生徒たちによってなされた巡回看護は然しながら、わが国訪問看護事業における、制度確立に至る源流の出発地点であった。

【注】

- 1) オルト (Major Grace Elizabeth Alt, Chief, Nursing Affair Division, P. H. & W. Section, G. H. Q. S. C. A. P.) はこの論文の巻頭において更に、次の様に叙述している。「これらの人たち (リンダ・リチャーズ等) の試練の道を想い出し、また多くの困難に出合いつつこれを克服して信ずる所へと邁進されたこと等を想い出すことは私たちに勇気と希望を与えてくれます。」「看護界の指導者」『看護学雑誌』1-1 (医学書院, 1946) pp.1-7.
- 2) Alt, Grace Elizabeth, 前掲書 p.6.
- 3) 同志社編『新島襄教育宗教論集』(岩波書店, 2010) pp.128-133.
- 4) 大国美智子『保健婦の歴史』(医学書院, 1973) pp.1-2.
- 5) 徳川早知子「同志社病院・京都看病婦学校第7年次報告書」『同志社談叢』18 (1998)

- 6) 生江孝之『社会福祉古典叢書④生江孝之集』(鳳書院、1983) p.110.
- 7) 高橋政子「写真にみる日本公衆衛生看護の歴史〔1〕」『看護実践の科学』5-1 (1980) p.78.
- 8) 生江孝之前掲書 p.110.
- 9) 生江孝之前掲書 p.110.
- 10) 地区看護事業 (District Nursing) 地域において家庭にいる病人に対する訪問看護。本文に於いて地区看護 (district nursing) については下記を参照。
- THE SEVENTH ANNUAL REPORT OF THE DOSHISHA MISSION HOSPITAL AND TRAINING SCHOOL FOR NURSES IN CONNECTION WITH. B. C. F. M. MISSION KYOTO JAPAN, 1893.
- 11) 佐伯理一郎『京都看病婦学校五十年史』(1936) p.4.
- 12) 佐伯理一郎前掲書, p.11.
- 13) 吉田久一『日本社会福祉思想史』(川島書店、1989) p.320.
- 14) 河本乙五郎「ペリー翁の事ども」大久保利武『日本におけるペリー翁』pp.158-159.
- 15) 同志社編『京都看病婦学校設立の目的』『新島襄教育宗教論集』(岩波書店、2010) pp.127-133.
- 16) 新潟県プロテスタント史研究会『新潟女学校と北越学館』(新潟日報社、1990) p.105.
- 17) 新潟県プロテスタント史研究会 前掲書 p.105.
- 18) 石井タツ子「ペリー先生の感化力」大久保利武『日本におけるペリー翁』(東京保護会、1929) p.162.
- 19) オルト前掲書, p.6.
- 20) Linda Richards, *Reminiscences of Linda Richards America's First trained nurse*, Boston, Mass., Whitcomb and Barrows, 1911.
- 21) Linda Richards, *ibid.*, pp.79-80.
- 22) Linda Richards, *ibid.*, pp.98-99.
- 23) Linda Richards, *ibid.*, p.81.
- 24) Linda Richards, *ibid.*, pp.98-99.
- 25) Linda Richards, *ibid.*, p.75.
- 26) 岡本さかき『ヨブの如く-百二歳 岡本老野-』(カルチュアクリエートサービス、1969)
- 27) 佐伯理一郎前掲書, p.54.
- 28) "The Seventh Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses" 1893, p.118.
- 赤坂病院について、生江は『日本基督教社会事業史』(教文館、1931) pp.105-107 において次の様に記述している。
- 赤坂病院は1883(明治16)年に米国人宣教師アンナ・エル・ホイットニー夫人の意志を嗣いで設立されたが、1887年に二代目ホイットニー博士は、キリ

スト教精神による慈善病院として経営された。赤坂病院は純然たる施療病院ではなく、資力に応じて料金を徴し、全く貧窮するもののみ施療とした。「(……中略)赤坂病院はミッションの経営でもなく、ホイットニー博士又宣教師でもなかった。然し、その熱烈なる信仰の下に、純真高潔なる精神と温良円満なる人格とを以てあらゆる邦人に接し、鋭意医療の仕事に従事せられたことは、正に初代宣教師の精神と均しく、而して其の業績の顕著なる決して他に遜色を見ない。……」と。

- 29) L. R. SEYMER, A GENERAL HISTORY OF NURSING, (小玉香津子訳 (1978)『看護の歴史』医学書院, p.258.)
- 30) 生江孝之「社会事業綱要」『社会福祉古典叢書④生江孝之集』(鳳書院、1983) p.110.『日本基督教社会事業史』(教文館) pp.204-208.

【参考文献】

- 阿知波五郎 Linda Richards in Japan, *American Journal of Nursing*, Aug, 1968.
- 土曜会歴史部会『京都の医学史』(1977)
- デロウリイ (G L Deloughery) 千野静香他訳『専門職看護の歩み』(日本看護協会出版会、1980) 同志社社史資料室『追悼集Ⅳ-同志社人物史(昭和10年~昭和12年)』(1993) 同志社大学 上野直蔵編『同志社百年史-資料編』(1979)
- 同志社大学アメリカ文化研究所 American Board Missionary Letters, [235] Miss Ida 同志社大学アメリカ文化研究所 American Board Missionary Letters, Ida V. Smith.
- 同 [85] Linda Richards.
- 同 [274] Linda Richards.
- ヘレン E. フレーザ著、成瀬四壽訳『実用看護法』(警醒社書店、1896)
- Goostroy, Stella, "Linda Richards, Notable American women" 神戸女学院同窓会誌「通信欄への手紙」『めぐみ』1896.
- 京都府医師会『京都の医学史』(思文閣出版、1980)
- Linda Richards, *Reminiscences of Linda Richards : America's First Trained Nurse*, Boston, Mass., Whitcomb and Barrows, 1911.
- 室田保夫『キリスト教社会福祉思想史の研究』(不二出版、1994)
- 室田保夫『留岡幸助の研究』(不二出版、1998)
- 室田保夫『近代日本の光と影 慈善・博愛・社会事業を読む』(関西学院大学出版会、2012)
- 本井康博『近代新潟におけるキリスト教教育』(思文閣

- 出版, 2007)
- 生江孝之『日本基督教社会事業史』(教文館出版部, 1931)
- 生江孝之『生江孝之集』(鳳書院, 1983)
- 生江孝之『戦前期社会事業基本文献集⑧社会事業綱要』(日本図書センター, 1996)
- 新潟県プロテスタント史研究会編『新潟女学校と北越学館』(新潟日報事業社出版部, 1990)
- 新潟県プロテスタント史研究会編『新潟県キリスト教史』(新潟日報事業社出版部, 1993)
- 岡本道男「近代日本の女子教育と神戸女学院」『神戸女学院 百年史各論』(1981)
- 高橋政子『日本近代看護の夜明け』(医学書院, 1977)
- 徳川早知子「Helen E. Fraser と成瀬四壽について」『第21回日本看護学会収録看護総合』(日本看護協会出版会, 1990)
- 上野直蔵「同志社の宣教師たち-明治期」『同志社百年史 通史編』(1977)
- 矢島浩『明治期キリスト教社会事業施設史研究』(雄山閣出版, 1982)

A Study on the History of the Visiting Nursing System in Japan : Dr. Berry and Three Missionary Nurses

Sachiko Tokugawa*

ABSTRACT

The beginning of the visiting nursing system in Japan can be traced back to regional nursing activity carried out by Doshisha Hospital in 1892.

In this thesis, I will attempt to examine the history of visiting nursing organizations from 1892 when rules for nurses at health centers were established.

In 1892, Helen E. Fraser, the nurses' supervisor at Kyoto Training School for Nurses and Doshisha Hospital, writes in detail on the topic of efforts by the Kyoto Training School for Nurses to establish a visiting nursing system in 1892. I was fortunate enough to track down *The Annual Report by the American Board on Doshisha Hospital and Kyoto Training School for Nurses* (in English) with the cooperation of the Doshisha Resource Library on the History of Doshisha. With regard to the training in district nursing work led by Fraser, it became clear that student nurses were professionally trained according to the educational curriculum of Kyoto Training School for Nurses which included a purpose, rules, metrics, and activities in the community. The nurses also formed a union under which the purpose of their work, rules, and an ethical code were stipulated, and they furthermore carried out visiting nursing work.

Today, patients are encouraged to leave hospitals early due to factors such as the rapidly increasing aging population, changes in disease structure due to an increase in chronic diseases, and financial pressure on the national budget due to increasing medical expenses. This means that the place of medical treatment is shifting from the hospital to the home. Visiting nurses have made a significant contribution to the fields of nursing and social welfare that should not be overlooked. Limitations of this study included being unable to fully investigate visiting nursing within the history of social welfare, on which its emphasis was placed. This represents an area for future research.

Key words : missionary nurse, Kyoto Training School for Nurses, visiting nursing, Doshisha Hospital

* 2nd Year Doctoral Course, Graduate School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University